
脳天怪奇

ジッテル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

脳天怪奇

【Nコード】

N4887K

【作者名】

ジツテル

【あらすじ】

どうして人間は愚かな行き方しか出来ないのか。

手探りで出口のない人生をどのように生きてらいいのか。

人生を振り返って書いてみます。

タイトルを少し変えました。

第1話 2B弾(前書き)

話がどのように進んで行くのか、私にもわからない状態です。

注意しながら書いて行きますが、途中から好ましくない話になりかねないこともあるかも知れません。そのときにはそこを避けてお読み下さい。

よろしくお願いいたします。

第1話 2B弾

「あー、靈子線れいしせんが絡からまっちゃった。」

友達と家に帰る間ずっと気になって心が重く沈んで行く。

少し前まで、どぶ川のような運河のところまで学校帰りに友達数人と2B弾を破裂させて遊んでいた。第三小学校六年三組の同級生達だ。

その中におっちゃんがいた。

おっちゃんと言うのはあだ名で、どうしておっちゃんになったのかよくわからない。

おっちゃんは遊びの天才で今日はポケットに赤っぱい色の2B弾を忍ばせていた。

五、六発爆破させるとなくなってしまったが、最後に新発売の水色っぱい色をした水雷弾を出した。

これは2B弾より少し太く水の中でも爆発するという新型爆弾だ。

「よし最後の一発だ。俺もまだ試したことがないんだけどさ。やるぞ。」

みんなが固唾かたすを呑んで見守る中、おっちゃんは水雷弾の頭こぶを傍そばにある煉瓦れんが塀べいに擦りつけて点火した。

「黄色い煙が出て来てから投げ込むんだ。」

おっちゃんはそう言つとタイミングを計りながら我慢して手に持っていた。

すると水雷弾の頭がシューシュー火を噴いて黄色い煙が出て来た。

「よし、今だ。」

おっちゃんが運河の真ん中へ水雷弾を投げ込んだ。

爆発するぞ。みんなが一斉に緊張して目を凝らした途端「ジュツ」と音がして水の中で静かになった。不発だ。

期待に膨らんだ気持ちが一気に萎んでしまった。

「なんだ、ダメじゃんかよ。水の中でも破裂するんじゃないのかよ。」

全員が落胆の声を上げて遊びは終わった。

その時に私は電信柱のまわりを迂闊にもグルグル三回まわってしまった。

三回まわつたら三回戻らなければならないのだが、友達に急かされて戻ることが出来なかった。

友達と別れて家に着いたが霊子線が電柱に絡みついて取れない妄想が不安と恐怖をどんどん膨らませて、居ても立ってもいられなくなってしまった。

おまけに以前からあった手の臭いを嗅ぐ癖も最近ますますひどくなつて、手が鼻にくっついまま取れないようになってしまっていた。

「あー、ぐあぐあぐあー」

私は泥沼の中で自由に身動き出来ないようなもどかしさで半狂乱になつて鼻の前の手をくねらせて振りほどいた。

そして急いで家を出て、さっきの電柱のところまで走って戻ると、また手が鼻に張り付いたまま逆方向へ三回まわった。

絡まっていた霊子線が解けてくるのを感じて、私は肩の荷がスーッとおりた気がして落ち着いた。

しかし鼻に手がくっついていて。離しても離しても磁石のように吸い付くのだ。

何者かが背後で囁く気配がいつも私を悩ませ続けている。そいつはいつも私に強い不安と恐怖を送り込んで来るのだ。

第2話 悪夢

しかし、私はいつ霊子線のことを知ったのだろう。

たぶん何かの本に書いてあったのかも知れないが記憶にないのだ。

そして、それが物に巻き付いて取れなくなると思い込んだのは何故なぜなのだろう。

その当時はそうとしか思えなかったのだ。

だから鉄棒などはもつてのほかだ。前回りなどしてしまつと、同じ回数をつしる回りして巻き戻さなければならぬのだ。

その労力と無駄な時間は私に強いストレスを感じさせていた。

そして背後で私に不安と恐怖を煽あおっている迷惑な存在もいつからそこにいるようになったのかもわからないままだったが、ただ一つ思い当たるふしもなくはなかった。

しかしそれがそうだと断言することも出来ないのだが。

それは戦後東京がまだ焼け野原で人々が戦争から帰って来て、バラツク建ての小屋がやっと増え始めて来たころ、父の転勤で私が地方から東京へ来て住むことになった。

まだ五、六歳くらいだったと思う。

それまで住んでいたのは山に囲まれ、美しい小川が幾筋も流れてい

る田園地帯で、空気は澄んでいてあたり一面の緑が生き生きとして
いるところだった。

しかし焼け野原の東京は殺伐として荒れ果てた砂漠のように感じら
れて息苦しかった。

そして東京に住むようになってから、夜蒲団に入って寝ようとする
と途端に金縛りになって、大きい犬のような動物が凶暴な威嚇の唸
り声を上げながら私の寝ているまわりをいつまでも高速で回転する。

どういう動物なのか見ようとするが、はや過ぎて形が見えない。

目が回るので見ないようにしようと思っても目を背けることが出来
ないのだ。

そのうち目が回って気持ちが悪く、頭がグラグラして来る。

そしてこの動物を背後で操っている者の気配が私を冷たく見下ろし
ているのを感じるのだ。

すると次に私は垂直の断崖の壁から少し突き出た細い道に置き去り
にされてしまう。

上を見ると遙かかなたまで壁が続いていて、下を見ると足がすくむ
真っ暗な底無しの断崖絶壁が無限に続いている。

私が恐怖に駆られて壁にしがみつきながら、そこから抜け出そうと
道を横歩きし出すと、どういう訳か移動するたびに壁がジワジワ迫
り出して、立っている足場がドンドン狭まって来る。

道が徐々に無くなって、そしてついに手の指と足の爪先^{つまさき}だけでかろうじて落ちないように踏^{ふん}ん張^ばらなければならぬところまで追いつめられてしまう。

「あー何でこんなところへ来てしまったんだ。こんなところへ来なければ、こんな恐ろしい目に合わなかったのに。」私は強く後悔した。

悔^くやんでも悔やみ切れない想いと、同時に落ちる恐怖で意識は狂乱状態になっている。

「あー、落ちるー、落ちるー、」私は壁にしがみつきながら絶叫した。

しかし壁は非情にも最後の足場をプツツと引つ込めた。

それでも私は死に物狂いで微^{かす}かな突^{とつき}起に手と足で取り付いていたが、ついに力尽きて滑^{すべ}り落ちる。

「うわー」悲鳴とともに私は落下して、耳に風切り音が「ゴーゴー」と聞こえている。

体がグルグル回転して落ち続け、落下するあの気持ち悪さが恐怖を増大する。無限に落ちて行く。いつまで経^たっても底に着かない。

「止まれー、止まれー、止まってくれー、誰か止めてくれー」私は必死に叫んだ。

そのうち真っ暗な、はるか下のほうに灰色の雲がうっすらと並^{なら}んでいるのが見えてきた。

「あそこに着地しよう。なんとかあの雲で止まって欲しい。」私は必死に念じた。

「頼むー。止まってくれー。」もうこれ以上落ちるのは嫌だ。

こんなに落ちたら戻れなくなる。私は不安に押し潰されそうになっていた。

雲がどんどん近づいて来る。瞬間に雲が迫って来たが、急に速度が緩んだかと思うとふわりと雲の上で止まった。念が通じたのだろうか。私はホッと息をついた。

「これからどうしたらいいんだろう。どうやっても宙ぶらりんの、この雲の上では行き場がないではないか。どうしたらいいんだ。」私は思案に暮れた。

しかし、ふと「この雲を突き抜けて落ちることはないんだろうか。」と一瞬思った途端、スポツと雲から抜け落ちた。

「わー」悲鳴を上げて、また真つ暗な奈落の底へ真つ逆さまに落ちて行く。

これが際限なく幾度も繰り返されてへトへトになった頃、汗びっしりになってやっと目が醒めた。

そして、この同じ夢が連日連夜繰り返されるようになって、寝ることが恐ろしかった。

これからこんな嫌なところに住まなければならぬのか。暗澹たる

思いで毎日田舎へ帰ることばかり考えて日々を過ごしていた。

そしてある日、第二小学校まで行った。

予防接種のためだったと思うが、その帰り道、海苔取り舟が舫つてある幅の広いどぶ川に沿った道を母に手を引かれて工業高校の近くまで歩いて来ると、右側に小さい祠があった。

それを通り過ぎた時、突然うしろから私を呼ぶ声があった。

第3話 声の主

私は母に手を引かれたまま振り向いた。

「うしろ振り向いても無駄だー。」声が怒鳴った。

うしろには誰もいない。しかし声だけが聞こえて来る。姿は見えないが、確かにはつきりと聞こえる。私は何が何だか理解出来なかった。

すると「今すぐおまえは選ばなければならない。」唐突に変なことを言い出した。

「選ぶ」わたしは一瞬なんだろうと思った。

「何を選べって言うんだ。」私は不安な気持ちになった。

「よいか、精神的苦悩と肉体的苦悩のどっちがいい。」声が強い口調で言った。

「えー、肉体的苦悩と精神的苦悩、どっちも嫌だ。いらないよ。」

私は断りもなく勝手にこんなことを選ばせる声の主に戸惑った。

何でこんなこと選ばなくちゃならないんだ。私は納得がいかなかった。

「つべこべ言わず選べばいいんだ。」声は有無を言わず何が何でも選ばせようとしていた。

「どっちがいいんだ。早くしろ。」その声がイライラして怒鳴った。私はまったく判断がつかなくて立ち往生したように考えが進まなくなってしまうた。

「肉体的苦悩じゃ手が無くなったり、足が無くなったりするだろう。歩けなくなってカッコ悪いし、精神的苦悩だと苦しいけど、体は大丈夫だ。でもやだ。こんなことすぐに決められないよ。もう少し考えて、あとから返事するようにしてもらおう。」

私はこの場を逃れようとして

「いますぐじゃ決められないから家に帰ってから決めたい。」と思った。

「ダメだ。いますぐに決めろ。いますぐだ。」声は断固だんことして逃げを許さない。

私はその声にだんだん逆さからえない気持ちになって、仕方なく

「じゃあ、精神的苦悩がいい。」と言ってしまった。

途端に「そうか、わかった。」姿のない声は突然解放されたかのようになり晴れ晴れとした声で、嬉うれしそうに言ったかと思うと、それっきりプツリと気配を消してしまった。

私は急に不安になって、自分の言ったことを取り消そうとした。

「ちょっと待って、今のは無しにする。選えびなおしたい。頼たのむから

返事をしてー。」

私は何度何度も心の中で叫んだ。しかしまったく反応がなかった。

これからのどのような精神的苦悩がやって来るのだろうか。あんなこと言わなければよかった。

後あとから後から後悔の思いが浮かんで来る。

しかしあれは誰なのだろう。何のためにわざわざ私にそのようなことを選ばせたのか。

それにしても何か変だ。五、六歳の子供に精神的苦悩だとか肉体的苦悩だとかいうことが理解出来るわけがないではないか。

ましてやそのような言葉すら誰にも習ってはいないのだ。

意味だつてわかるはずがないだろう。

しかし今になって思うと不思議なことに理解していたのだ。

これは肉体の言葉で伝えて来たものではなく、テレパシーだったのではないだろうか。

テレパシーは肉体的言語ではなく、意識の波動を他の意識に送り込むために、すべての感情や感覚が直じかに伝わるものなのかも知れない。

そしてその声は私には聞こえていたが母にはまったく聞こえていなかった。

敗戦の東京（前書き）

ストーリーが出てきて書き始めたのですが、このさきどう展開して行くのか自分でもまったくわかりません。実話なのですが、なんだか脱線して行きそうです。わけがわからなくなってしまうしたら寛大に受け止めてくださいますようお願いいたします。

敗戦の東京

私はしばらく精神的苦悩を選んでしまったことに不安と後悔を感じていたが、

日々の生活に対応していくことに気を取られて、そのことは記憶の隅に追いやられてしまった。

しかし、ふと気が付くと家の中の雰囲気は薄暗く、部屋の北側の壁が下から半分ほど破けて、そこから間断なくブリザードが吹き込んで、いつも雪が舞っていた。

それは現実の壁が破けているわけではなく、いつも二重写しになって感じるのだ。

戦後の荒れ果てた東京の町には空襲で焼け落ちた家のコンクリートの土台がいたるところに残っていて、丈の高い雑草が生い茂っている。

その中にバラック建てのボロ家があちらこちらに建っていた。

食糧難で食べ物が少なかったために、引き揚げて来て住む家もないヨレヨレの軍服を着た髭もじゃでうす汚れた復員兵がコンクリートの土台に腰を掛け、火を焚いて、その上に水を入れた空き缶を置き、雑草を煮て、落ちている枯れ枝を箸がわりにして食べていた。

一般の家庭でも月に一度、配給される米がひと月ともたず無くなっ

てしまうと、うどん粉に水を入れて、こねた物を団子にして野菜と一緒に煮た雑炊ぞうすいを食べていた。

私とおっちゃんはおやつがわりに広い海苔干し場の土地境界線のところはに生えている高くそびえた太いイチジクの木によじ登って、鳥の食べ残した赤黒く、熟し過ぎて柔らかくなくなった実をもいで食べたり、よその家の柿の実をもらって食べたりしていた。

他の子供達も同じで、みんな栄養失調で青ん鼻あおばなを垂たらしながらも元気に跳び回っていた。

この親友のおっちゃんは俊則という名前だが悪戯いたずらばかりして、いつも母親を困らせていた。

たしか六歳位の頃だったか。

私の家の西隣のおっちゃん家は子供の背丈位のところに幅一間程はばいっけんほどの窓があった。

曇りガラスの引き戸を開けるとその敷居しきいに子供が乗って立ち上がるくもりことが出来る。

おっちゃんはその上なのって

「ここーは大森四丁目ー。ここーは大森四丁目ー。」

節をつけて繰り返し歌うように大声を張り上げていた。

しばらく繰り返していたが、ふと何かを思いついたのだろう。

「あんちゃん、あんちゃん。ちょっと来てー。」

兄の成一を呼んだ。

「なんだよ。なんか用かよ。」

兄がめんどくさそうにやって来た。

「あんちゃん、いいものあげるからここへ来て向こう向いてみて。」

「なんだよ。何くれるんだよ。」

「いいからここんどこ来て早くあっち向いて。」

おっちゃんは強引に兄をうしろ向きにさせると

「目をつぶって。いまいい物あげるから。いいって言つまで目を開けないでね。」

兄は不審ふしんに思いながらうしろを向いて目を閉じた。

突然バシヤバシヤバシヤバヤ上から何かが降って来るなり坊主頭から顔へ流れ落ちた。

兄は一瞬何が起きたのかわからず固まっていたが、水のようなものが顔に流れて来て我に返った。

「あー」

慌あわてて逃げながら体を折り曲げ、むせて咳せき込んで、顔を拭ぬぐってうし

ろを見上げると仁王立ちしたおっちゃんのおちんちんから小便が勢いよく出ていた。

「かあちゃーん。かあちゃーん。俊則が俺の頭にしょんべんしたよー。」

兄は泣きながら母親に訴えた。

「俊則ー。おまえは何で悪いことばかりするんだよ。まったく悪い子だね。」

母親に叱られても、まるで涼しい顔で平然と笑っていた。

それからしばらく経っておっちゃん家に行くとき開け放たれている縁側から座敷を見ると、おぶい紐で手足を縛られ、天井の梁から吊されて泣き叫んでいるおっちゃんがいた。

母親がむき出しになっている尻を長い竹の物差しでビシビシひっぱたいている。

「何でおまえは悪いことばかりするんだ。あれほど食べちゃダメって言っただろう。どうして言うことを聞けないんだ。」

ひとしきり怒鳴りつけるとまたビシビシ尻を叩いた。

どうも残り少ない砂糖を全部舐めてしまったらしい。

この当時、砂糖はなかなか手に入らないものだったのだ。

人間にとって食い物の恨みは恐ろしいものなのだ。

東隣の借家には若い女性が住んでいた。

あるとき開け放っている玄関の前を通ると、六畳一間の部屋の中で進駐軍の黒人兵が彼女の肩に腕をまわして微笑みながらこちらを見ていた。

私はそれが恐ろしくて、その玄関の前を通るときはいつも走り抜けていた。

そのあと、いつの間にか彼女は借家からいなくなって、しばらく空き家のままだったが、

ある日家族が引越して来た。

父親と母親それに男の兄弟が二人。

弟は私と同年くらいだった。

しかし私はその家族に何か胡散臭いうさんくさいものを感じて、こちらから近づいて行くことはしなかったが、その兄弟の弟はなかなか気さくなところがあつて向こうから近づいて来た。

そして一緒に遊ぶようになった。

その家の母親は暗く神経質でいつもピリピリして眉間みけんにしわを寄せ、金切りかなきり声を上げて子供達を怒鳴りななつけては、そのたびに兄のほうを目のかたきにしてバチバチひっぱっていた。

そのためか兄は精神がだいぶおかしくなっていた。

世の中が乱れて悪事が横行し治安の悪い殺伐ころはつとした東京で暮らして
いると、人間はまともではいられなくなるのかも知れない。

第5話 ビフテキだ（前書き）

お知らせ

お世話になっております。ありがとうございます。

私の小説を読んでくださる皆様には申し訳ありません。

このたび一身上の都合により、当分のあいだ投稿出来ない状態になってしまいました。

いままで投稿したものはこのままにしておきますので、続きを投稿できるようにになりましたら

またよろしくお願いいたします。

第5話 ビフテキだ

私は幼稚園に入ったが集団になじめなかった。

まだ東京弁を使えず方言が抜けなかった。

しゃべれば馬鹿にされる。

私は声を出すことさえ恐ろしかった。

そのため当然無口になってしまう。

友達も出来ない。

はたから見ると何を考えているのかわからない子供になっていた。

親からするとじいさんばあさんに甘やかされた根性なしの甘ったれに感じたのだろう。

両親のスパルタ教育が始まった。

甘ったれた性根ねを入れ直すには根性きんを鍛え直すしかない。

「鉄は熱いうちに打て。根性を鍛え直すにはぶん殴なぐるしかない。

早飯早グソだ。もたもたするな。」

それは軍隊教育で培つちかわれたものなのだろう。

兵隊から帰って来て間もない父はまだ戦争時代の考え方から抜けられていなかった。

しかし私の側がわからすれば根性の問題ではなく、言葉の問題だったのだ。

早く東京弁を覚えなければ人と話しが出来ないと必死な思いだった。

だから周りの人が話している言葉を黙って聞き続けていたのだ。

他人から話しかけられてもまだ東京弁を話せないから返事を返せなかった。

うっかりしゃべるものなら

「そうだんべ。そうなんかい。やったんべ。ちがうんかい。」

途端に

「なんだ、こいつ言葉が変だぞ。どこから来たんだ。」

ということになるのだ。

プライドと気位が高い私にとって死ぬことよりもつらいことだった。

そのため私は家の中にもいても、外にも、どこにも居場所がなかった。

問題児扱いの幼稚園も辛つらくて嫌々（いやいや）ながら行っていた。

そしてひとりの友達も出来ないままやつと卒園した。

そして小学校に上がったが相変わらずだった。

しかし言葉を徐々に覚えてきて近所の子供達とは遊ぶようになっていた。

でも一度感じた恐怖心はなかなか抜けるものではない。

少数数の友達となら話せるが大勢の人の前に立つと言葉が出てこないのだ。

小学校一年生の通信簿は一と二ばかりでおまけに、

「しゃべることが不得手ふえてで意志薄弱いしはくじやく。

自分の思っていることを伝えることが出来ない。」

と書いてあった。

それを見たプライドと気位の高い母は激怒した。

私の両親は頭がよく、小学校から大学まで特待生で学費を払ったことがない。

ということが自慢だった。

それなのに自分の息子が通信簿が一と二ばかりで、意志薄弱とこき下ろされている。

そんなふうにはかにされた評価をもらっても、

ポーツと脳天気にもも考えていない根性なしの息子を見て途端に力
ーッとした。

「おまえがだらしなからこうやって親が恥をかくんだ。

親が誇れるような子供に何故なせなるうとしないんだ。」

母は涙が出てきて思わずバチバチところかまわず私をひっぱたいて
いた。

親が子供の悩みを本当に理解することは至難しなんの技わざだ。

まず理解出来ないのではないだろうか。

もし自分は子供のことを理解出来ていると思っている人がいたとし
たら、

それは傲慢じょうまんか半端はんぱんな自己満足かではなからうかと思ってしまう。

そんなとき、家に父親が以前、故郷の中学校で教えた教え子が二人
訪ねて来た。

父は東京美術学校（いまの東京芸術大学）出身で、

東京へ出て来てから東京都文京区の中学校の美術の教師をしていた。

田舎の中学校で教えていたときの教え子は二人とも大学生になって
いた。

食糧難の時代ということもあるが掘^ほつ建て^た小屋を建てるために借金をしていて、

その返済のため生活は困窮^{いんきゆう}し、普段は肉無しの質素な食事だった。

しかしお客さんが来たときは奮発^{ふんぱつ}して豚肉入り料理が少し出る。

この日は薄切りの豚肉を長いままフライパンで焼いて塩、胡椒^{こしよつ}したものであった。

薄暗い裸電球の下で、父は焼肉が食卓にならぶと妙な興奮状態になつて

「ビフテキだ。ビフテキだ。」

としきりに口ばしって気が変になっていた。

私もビフテキとはどういうものかわからないまま興奮状態^{おちい}に陥^{おちい}った。

母が全員のご飯をよそつたのを見計^{みはか}らつて

「それじゃあ、いただきますか。みんな遠慮しないでたくさん食べるよ。」

と父が言った。

私は久しぶりの肉に心が踊った。

なにしろ薄切りでペラペラの細長い肉が一枚だけ皿の上にある。

一口でなくなってしまうほどだが。

これでご飯を二杯食べるには緻密ちみつな計算がいるのだ。

私は慎重にほんのひとかじりつつ食べながらご飯を食べ始めた。

すると左隣にいる父が私の耳元で

「おまえな。肉ばかり食っていると、うんこが固くなるんだぞ。」
とささやくのだ。

「ご飯食べてるときになんでそんな嫌なことを言っただろうと思った。

また私が肉をかじると

「肉ばかり食っていると、うんこが固くなるんだ。」

父は私が肉を食べるたびに耳元でささやき続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4887k/>

脳天怪奇

2010年10月9日21時30分発行